

大阪府感染症発生動向調査週報（速報）

2019年 第29週（7月15日～7月21日）

今週のコメント

～手足口病～ 手洗いの励行、排泄物の適切な処理とタオルを共用しないことが重要

定点把握感染症

「夏型感染症（手足口病、ヘルパンギーナ）減少」

第29週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は3,326例であり、前週比19.0%減であった。定点あたり報告数の第1位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、ヘルパンギーナ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ6.01、3.78、1.89、1.80、1.29であった。

手足口病は前週比30%減の1,184例で、大阪市北部9.23、大阪市西部8.10、北河内7.82、南河内7.25、大阪市南部7.00であった。

感染性胃腸炎は14%減の745例で、南河内5.94、中河内5.65、北河内4.67である。

ヘルパンギーナは14%減の373例で、大阪市北部4.31、大阪市西部2.90、北河内2.85であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は23%減の354例で、南河内3.31、中河内3.05、北河内2.63である。

伝染性紅斑は19%増の255例で、北河内3.44、堺市1.79、泉州1.70であった。

第6位のRSウイルス感染症は21%増の140例で、3週連続で増加している。

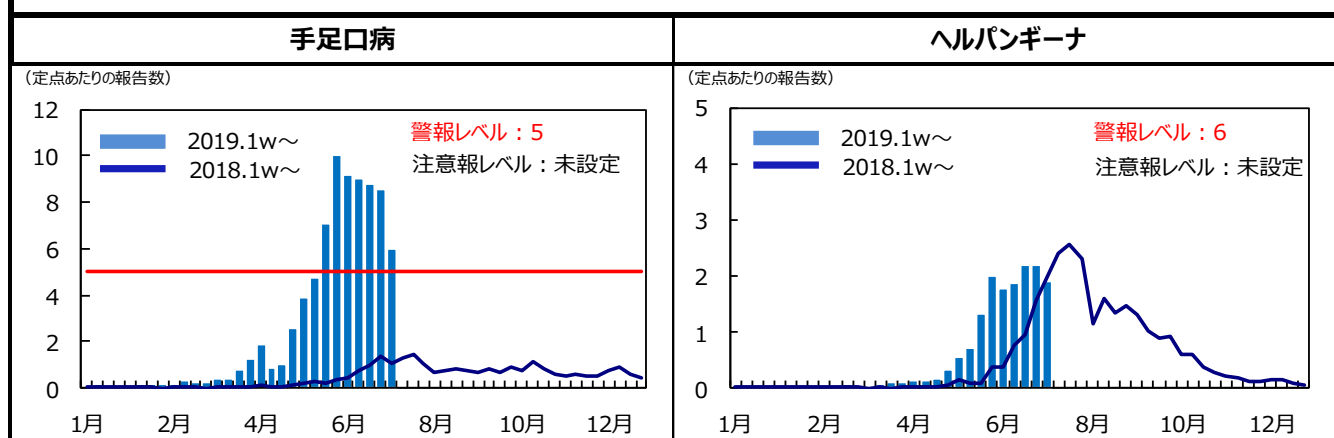


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2019年 第29週7月15日～7月21日）

第29週の順位	第28週の順位	感染症	2019年 第29週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第29週の 定点あたり 報告数	2019年第29週の 年齢別 患者発生数 最大割合値
1	1	手足口病	6.01	30%減	1.10	1歳_30%
2	2	感染性胃腸炎	3.78	14%減	4.10	1歳_16%
3	4	ヘルパンギーナ	1.89	14%減	1.97	1歳_29%
4	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.80	23%減	1.86	3歳_13%
5	5	伝染性紅斑	1.29	19%増	0.11	5歳_18%

第29週のコメント

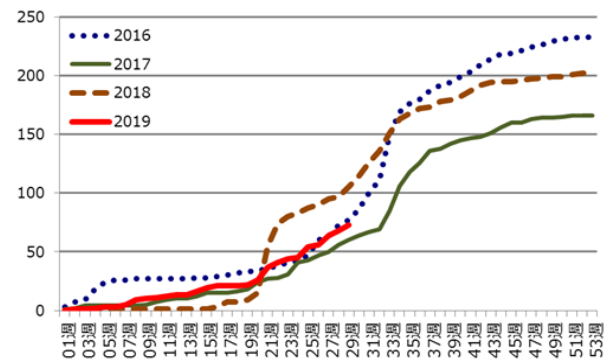
～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期において、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる（出血性大腸炎）。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。

(累積報告数)



[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)

[腸管出血性大腸菌感染症とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数（2019年 第29週7月15日～7月21日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
(報告があった疾患のみ記載しています)

	疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	5	1		1					3	73
4類感染症	A型肝炎	1			1						13
	デング熱(4型)	1								1	26
	日本紅斑熱	1								1	1
	レジオネラ症(肺炎型)	2		1					1		45
5類感染症	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	1						1			93
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1	1								31
	後天性免疫不全症候群	2								2	68
	侵襲性肺炎球菌感染症	2	1							1	176
	梅毒	7	1		1					5	610
	百日咳	5	2						2	1	518
	風しん	1								1	120
	麻しん	1								1	145
結核 (2019年5月分)	結核 新登録患者数：150名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 49名) (府内累積報告数 708名、内 肺・喀痰塗抹陽性 267名)										

(2019年7月23日 集計分)